

# わかれ道

樋口一葉

青空文庫



## 上

お京さん居ますかと窓の戸の外に来て、ことごとと羽目を敲く音のするに、誰だえ、  
 もう寝て仕舞つたから明日来てお呉れと嘘を言へば、寝たつて宜いやね、起きて明けてお  
 呉んなさい、傘屋の吉だよ、己れだよと少し高く言へば、いやな子だね此様な遅くに何を  
 言ひに来たか、又お餅のおねだりか、と笑つて、今あけるよ少時辛防おしと言ひなが  
 ら、仕立かけの縫物に針どめして立つは年頃二十餘りの意氣な女、多い髪の毛を忙  
 しい折からとて結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の臺なしな半天を着  
 て、急ぎ足に沓脱へ下りて格子戸に添ひし雨戸を明くれば、お氣の毒さまと言ひながら  
 ずつと這入るは一寸法師と仇名のある町内の暴れ者、傘屋の吉とて持て餘しの小僧な  
 り、年は十六なれども不圖見る處は一か二か、肩幅せばく顔少さく、目鼻だちはきり  
 くと利口らしけれどいかにも脊の矮ければ人嘲りて仇名はつけゝる、御免なさい、と火  
 鉢の傍へづかくと行けば、お餅を焼くには火が足らないよ、臺所の火消壺から消  
 し炭を持つて来てお前が勝手に焼いてお喰べ、私は今夜中に此れ一枚を上げねばならぬ、

角かどの質屋しちやの旦那だんなの御年ごねん始し着しだからとて針はりを取とれば、吉きちはふゝんと言いつて彼あの元げ頭あたまには惜をしい物ものだ、御初おはつう穂おを己おれでも着きて遣やらうかと言いへば、馬鹿ばかをお言いひでない人ひとのお初は穂はを着きると出しゆつせ世せが出來できないと言いふではないか、今いまつから伸のびる事ことが出來できなくて仕しかた方たが無い、其様そんなな事ことを他處よその家うちでもしては不いけな可いよと氣きを附つけるに、己おれなんぞ御出ごしゆつせ世せは願ねがはないのだから他人ひとの物ものだらうが何なんだらうが着きかぶつて遣やるだけが徳とくさ、お前まへさん何時いつか左様さうい言いつたね、運うんが向むく時ときになると己おれに糸いと織おりの着物きものをこしらへて呉くれるつて、本當ほんたうに調製こしらへて呉くれるかえと眞面目まじめだつて言いへば、それは調製こしらへて上あげられるやうならお目出めで度たいのだもの喜よろこんで調製こしらへるがね、私わたしが姿すがたを見てお呉くれ、此様こんな容よう躰たいで人ひとさまの仕し事ことをして居ゐる境きやう界がいではなからうか、まあ夢ゆめのやうな約やく束そくさとして笑わらつて居ゐれば、いゝやなそれれは、出來できない時ときに調製こしらへて呉くれとは言いはない、お前まへさんに運うんの向むいた時ときの事ことさ、まあ其そ様んな約やく束そくでもして喜よろこばして置おいてお呉くれ、此様こんな野郎やらうが糸いと織おりぞろへを被かぶつた處ところをかしくも無いけれども淋さびしさうな笑ゑがほ顔をすれば、そんなら吉きちちやんお前まへが出しゆつせ世せの時ときは私わたしにもしてお呉くれか、其約そのやく束そくも極きめて置おきたいねと微笑ほゝゑんで言いへば、其奴そいつはいけな、己おれは何どうしても出しゆつせ世せなんぞは爲しないのだから。何故なぜ々々々。何故なぜでもしない、誰だれが來きて無理むりやりりに手てを取とつて引ひ上あげても己おれは此處こゝに斯かうして居ゐるのがいゝのだ、傘屋かさやの油引あぶらひ

きが一番好いのだ、何うで盲目縞の筒袖に三尺を脊負つて産て來たのだらうか  
 ら、澁を買ひに行く時かすりでも取つて吹矢の一、本も當りを取るのが好い運さ、お前さ  
 んなどは以前が立派な人だといふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに來やすのさ、  
 だけれどもお妾になるといふ謎では無いぜ、悪く取つて怒つてお呉んなさるな、と火なぶ  
 りをしながら身の上を歎くに、左様さ馬車の代りに火の車でも來るであらう、随分胸の  
 燃える事があるからね、とお京は尺を杖に振返りて吉三が顔を諦視りぬ。

例の如く臺所から炭を持出して、お前は喰ひなさらぬかと聞けば、いゝえ、とお  
 京頭をふるに、では己ればかり御馳走さまにならうかな、本當に自家の吝嗇奴めやか  
 ましい小言ばかり言やがつて、人を使ふ法をも知りやがらない、死んだお老婆さんはあ  
 んのでは無かつたけれど、今度の奴等と來たら一人として話せるのは無い、お京さんお前  
 は自家の半次さんを好きか、随分厭味に出來あがつて、いゝ氣の骨頂の奴ではない  
 か、己れは親方の息子だけれど彼奴ばかりは何うしても主人とは思はれない、番ごと  
 喧嘩をして遣り込めてやるのだが随分おもしろいと話しながら、鐵網の上へ餅を  
 のせて、お熱々と指先を吹いてかゝりぬ。

己れは何うもお前さんの事が他人のやうに思はれぬは何ういふものであらう、お京さん

お前は弟といふを持つた事は無いのかと問はれて、私は一人子で同胞なしだから弟にも妹にも持つた事は一度も無いと言ふ、左様なあ、それでは矢張何でも無いのだらう、何處からか斯うお前のやうな人が己れの眞身の姉さんだとか言つて出て來たらどんなに嬉しいか、首つ玉へ嘯り着いて己れはそれぎり往生しても喜ぶのだが、本當に己れは木の股からでも出て來たのか、つひしか親類らしい者の逢つた事も無い、それだから幾度も幾度も考へては己れはもう一生誰れにも逢ふ事が出來ない位なら今のうち死んで仕舞つた方が氣樂だと考へるがね、それでも慾があるから可笑しい、ひよつくり變てこな夢なんかを見てね、平常優しい事の一言も言つて呉れる人が母親や親父や姉さんや兄さんのやうに思はれて、もう少し生きて居やうかしら、もう一年も生きて居たら誰れか本當の事を話して呉れるかと楽しんでね、面白くも無い油引きをやつて居るが己れ見たやうな變な物が世間にも有るだらうかねえ、お京さん母親も父親も空つきり當が無いのだよ、親なして産れて來る子があらうか、己れは何うしても不思議でならない、と焼あがりし餅を兩手でたつきつゝいつも言ふなる心細さを繰返せば、それでもお前筐づる錦の守り袋といふやうな證據は無いのかえ、何か手懸りは有りさうなものだねとお京の言ふを消して、何其様な氣の利いた物は有りさうにもしない生れると直さま橋の袂の

貸赤子に出されたのだなど、朋輩の奴等が悪口をいふが、もしかすると左様かも知れない、それなら己れは乞食の子だ、母親も父親も乞食かも知れない、表を通る襤褸を下げた奴が矢張己れが親類まきで毎朝きまつて貰ひに来る跛隻眼のあの婆あ何かで己れの爲の何に當るか知ればしない、話さないでもお前は大抵知つて居るだらうけれど今の傘屋に奉公する前は矢張己れは角兵衛の獅子を冠つて歩いたのだからと打しをれて、お京さん己れが本當に乞食の子ならお前は今までのやうに可愛がつては呉れないだらうか、振向いて見ては呉れまいねと言ふに、串戲をお言ひでないお前が何のやうな人の子で何んな身かそれは知らないが、何だからとつて厭がるも厭がらないも言ふ事は無い、お前は平常の氣に似合ぬ情ない事をお言ひだけれど、私が少しもお前の身なら非人でも乞食でも構ひはない、親が無からうが兄弟が何うだらうが身一つ出世したらば宜からう、何故其様な意氣地なしをお言ひだと勵ませば、己れは何うしても駄目だよ、何にも爲やうとも思はない、と下を向いて顔をば見せざりき。

## 中

今は亡せたる傘屋の先代に太つ腹のお松とて一代に身上をあげたる、女相撲のやうな老婆様ありき、六年前の冬の事寺参りの歸りに角兵衛の子供を拾ふて來て、いよ親方からやかましく言つて來たら其時の事、可愛想に足が痛くて歩かれないと言ふと朋輩の意地悪が置去りに捨て、行つたと言ふ、其様な處へ歸るに當るものか此とも怕かない事は無いから私が家に居なさい、みんなも心配する事は無い何の此子位のもの二人や三人や臺所へ板を並べてお飯を喰べさせるに文句が入るものか、判證文を取つた奴でも驅落をするもあれば持逃げの吝な奴もある、料簡次第のものだわな、いはゞ馬には乗つて見ろさ、役に立つか立たないか置いて見なけりや知れはせん、お前新網へ歸るが厭なら此家を死場と極めて骨を折らなきやならないよ、しつかり遣つてお呉れと言ひ含められて、吉やくと夫れよりの丹精今油ひきに、大人三人前を一手に引うけて鼻唄交り遣つて退ける腕を見るもの、流石に眼鏡と亡き老婆をほめける。恩ある人は二年目に亡せて今の主も内儀様も息子半次も氣に喰はぬ者のみなれど、此處を死場と定めたるなれば厭とて更に何方に行くべき、身は疝癩に筋骨つまつてか人よりは一寸法師一寸法師と誹らるゝも口惜しきに、吉や手前は親の日に腥さを喰たであらう、ざまを見ろ廻りの廻りの小佛と朋輩の鼻垂れに仕事の上の仇を返されて、鐵



なこぶし 拳に撲倒す勇氣はあれど誠に父母いかなる日に失せて何時を精進日とも心得  
 なき身の、心細き事を思ふては干場の傘のかげに隠れて大地を枕に仰向き臥してはこ  
 ぼる、涙を呑込みぬる悲しさ、四季押し通し油びかりする目くら縞の筒袖を振つて火の  
 たま玉のやうな子だと町内に恐がられる亂暴も慰むる人なき胸苦しきの餘り、假にも  
 やさしう言ふて呉れる人のあれば、しがみ附いて取つて離れがたなき思ひなり。仕事屋の  
 お京は今年の春より此裏へと越して來し者なれど物事に氣才の利きて長屋中への交  
 きあひ 際もよく、大屋なれば傘屋の者へは殊更に愛想を見せ、小僧さん達着る物のほころ  
 びでも切れたなら私の家へ持つてお出、お家は御多人數お内儀さんの針持つていらつしや  
 る暇はあるまじ、私は常住仕事疊紙と首つ引の身なればほんの針造作は無い、一  
 とりずまゐ 人住居の相手なしに毎日毎夜さびしく暮して居るなれば手すきの時には遊びにも來て  
 くだ 下され、私は此様ながらがらした氣なれば吉ちゃんやんのやうな暴れさんが大好き、疝癩  
 がおこつた時には表の米屋が白犬を擲ると思ふて私の家の洗ひかへしを光澤出しの小槌  
 に、礎うちでも遣りに來て下され、それならばお前さんも人に憎まれず私の方でも大助  
 かり、ほんに兩爲で御座んすほどにと戯言まじり何時となく心安く、お京さ  
 んお京さんとして入浸るを職人ども挑發ては帶屋の大將のあちらこちら、桂

川がの幕まくがで出る時ときはお半はんの脊せなに長右衛門ちやうゑもんと唱うたはせて彼の帶おびの上うへへちよこなんと乗のつて出で  
 るか、此奴こいつは好いいお茶番ちやばんだと笑わらはれるに、男をとこなら眞似まねて見みろ、仕事しごとやの家うちへ行いつて茶ちやだ  
 棚なの奥おくの菓子鉢くわしぼちの中なかに、今日けふは何なにが何箇いくつあるまで知しつて居ゐるのは恐おそらく己おれの外ほかには  
 有あるまい、質屋しちやの元はげ頭あたまめお京きやうさんに首くびつたけで、仕事しごとを頼たのむの何なにが何どうしたとか小こ  
 るさく這入はいりこ込んで前まへだれの半襟はんえりの帶おびつ皮かはのと附つけ屈くをして御機嫌ごきげんを取とつては居ゐるけ  
 れど、つひしか喜よろこんだ挨拶あいさつをした事ことが無ない、ましてや夜よるでも夜中よなかでも傘屋かさやの吉きちが來きたと  
 さへ言いへば寢間着ねまきのまゝで格子戸かうしとを明あけて、今日けふは一日遊いちにちあそびに來こなかつたね、何どうかお  
 爲しか、案あんじて居ゐたにと手てを取とつて引入ひきいられる者ものが他ほかにあらうか、お氣きの毒どく様なごつた  
 が獨活うどくの大木たいぼくは役やくにたゝない、山椒さんしよは小粒こつぶで珍ちんちよう重ちゆうされると高たかい事ことをいふに、此このや  
 野郎らうめと脊せを酷ひどく打うたれて、有ありがたう御座ございますと澄すまして行ゆく顔かほつき身長せいさへあれば  
 人串ひとす戯はなとて恕ゆるすまじけれど、一寸法師いっすんぼしの生意氣なまいきと爪つまはじきして好いい鬚なぶりものに烟草たばこや  
 休すみの話はなしの種たねなりき。

じふにぐわつさんじふにち  
 十二月三十日の夜、吉は坂上の得意場へ詠への日限の遅れしを詫びに行きて、  
 歸りは懐手の急ぎ足、草履下駄の先にかゝるものは面白づくに蹴かへして、ころゝ  
 と轉げる、右に左に追ひかけては大溝の中へ蹴落して一人からゝと高笑ひ、聞  
 者なくて天の上のお月さま宛も皓々と照し給ふを寒いといふ事知らぬ身なれば唯こゝ  
 ちよく爽かにて、歸りは例の窓を敲いてと目算ながら横町を曲れば、いきなり後よ  
 り追ひすがる人の、兩手に目を隠して忍び笑ひするに、誰れだ誰れだと指を撫で、何  
 だお京さんか、小指のまむしが物を言ふ、嚇かしても駄目だよ顔を振のけるに、憎らし  
 い當てられて仕舞つたと笑ひ出す。お京はお高祖頭中眉深に風通の羽織着て例に似合ぬ  
 美き粧なるを、吉三は見あげ見おろして、お前何處へ行きなすつたの、今日明日は忙が  
 しくてお飯を喰べる間もあるまいと言ふたではないか、何處へお客様にあるいて居た  
 のと不審を立てられて、取越しの御年始ぎと素知らぬ顔をすれば、嘘を言つてるぜ三十日  
 の年始を受ける家は無いやな、親類へでも行きなすつたかと問へば、とんでもない親  
 類へ行くやうな身に成つたのさ、私は明日あの裏の移轉をするよ、あんまりだしぬけ  
 だから嘸お前おどろくだらうね、私も少し不意なのでまだ本當とも思はれない、兎も角  
 喜んでお呉れ悪い事では無いからと言ふに、本當か、本當か、吉は呆れて、嘘では無

いか串戯では無いか、其様な事を言つておどかして呉れなくても宜い、己れはお前が  
 居なくなつたら少しも面白くない事は無くなつて仕舞ふのだから其様な厭な戯言は廢し  
 にしてお呉れ、え、詰らない事を言ふ人だと頭をふるに、嘘ではないよ何時かお前が言つ  
 た通り上等の運が馬車に乗つて迎ひに來たといふ騒ぎだから彼處の裏には居られない、  
 吉ちゃん其うちに糸織ぞろひを調製へ上ると言へば、厭だ、己れは其様な物は貰ひ  
 たくない、お前その好い運といふは詰らぬ處へ行かうといふのではないか、一昨日自家の  
 半次さんが左様言つて居たに、仕事やお京さんは八百屋横町に按摩をして居る伯父さ  
 んが口入れで何處のかお邸へ御奉公に出るのださうだ、何お小間使ひといふ年ではなし、  
 奥さまのお側やお縫物師の譯はない、三つ輪に結つて總の下つた被布を着るお妾さまに  
 相違は無い、何うしてあの顔で仕事やが通せるものかと此様な事を言つて居た、己れは其  
 様な事は無いと思ふから、間違ひだらうと言つて大喧嘩を遣つたのだが、お前もしや  
 其處へ行くのでは無いか、其お邸へ行くのであらう、と問はれて、何も私だとして行きたい  
 事は無だけれど行かなければならないのさ、吉ちゃんお前にもう逢はれなくなるねえ、  
 とて唯言ふことながら萎れて聞ければ、どんな出世に成るのか知らぬが其處へ行くのは  
 廢したが宜からう、何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう、あれほど利

てく手を持つて居ながら何故つまらない其様な事を始めたのか、あんまり情ないではないか  
 と吉は我身の潔白に較べて、お廢しよ、お廢しよ、斷つてお仕舞など言へば、困つたね  
 とお京は立止まつて、それでも吉ちやん私は洗ひ張に倦きが來て、もうお妾でも何でも宜  
 い、何うで此様な詰らないづくめだから、いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさうと思ふ  
 のさ。

思ひ切つた事を我れ知らず言つてほくと笑ひしが、兎も角も家へ行かうよ、吉ちやん少  
 しお急ぎと言はれて、何だか己れは根つから面白くも思はれない、お前まあ先へ出  
 よと後に附いて、地上に長き影法師を心細げに踏んで行く、いつしか傘屋の路次  
 を入つてお京が例の窓下に立てば、此處をば毎夜音つれて呉れたのなれど、明日の晩は  
 もうお前の聲も聞かれない、世の中つて厭なものだねと歎息するに、それはお前の心が  
 くだとて不満らう吉三の言ひぬ。

お京は家に入るより洋燈に火を點して、火鉢を掻きおこし、吉ちやんやお焙りよと聲を  
 かけるに己れは厭だと言つて柱際に立つて居るを、それでもお前寒からうではないか  
 風を引くといけないと氣を附ければ、引いても宜いやね、構はずに置いてお呉れと下を向  
 いて居るに、お前は何うかおしか、何だか可笑しな様子だね私の言ふ事が何か疝にでも障

つたの、それなら其やうに言つて呉れたが宜い、黙つて其様な顔をして居られると氣に成つて仕方が無いと言へば、氣になんぞ懸けなくてもいゝよ、己れも傘屋の吉三だ女のお世話には成らないと言つて、凭かかりし柱に脊を擦りながら、あゝ詰らない面白くない、己れは本當に何と言ふのだらう、いろいろの人が鳥渡好い顔を見せて直様つまらない事に成つて仕舞ふのだ、傘屋の先のお老婆さんも善い人であつたし、紺屋のお絹さんといふ縮れつ毛の人も可愛がつて呉れたのだけれど、お老婆さんは中風で死ぬし、お絹さんはお嫁に行くを厭がつて裏の井戸へ飛込んで仕舞つた、お前は不人情で己れを捨て、行くし、もう何も彼もつまらない、何だ傘屋の油ひきなんぞ、百人前の仕事をしたらとつて褒美の一つも出やうでは無し、朝から晩まで一寸法師の言はれつゞけで、それだからと言つて一生経つても此身長が延びやうかい、待てば甘露といふけれど己れなんぞは一日々々厭な事ばかり降つて來やがる、一昨日半次の奴と大喧嘩をやつて、お京さんばかりは人の妾に出るやうな腸の腐つたのではないと威張つたに、五日とたゞずに兜をぬがなければ成らないのであらう、そんな嘘つ吐きの、ごまかしの、慾の深いお前さんを姉さん同様ねえ どうやう おもに思つて居たが口惜しい、もうお京さんお前には逢はないよ、何うしてもお前には逢はないよ、長々御世話さま此處からお禮を申します、人をつけ、もう誰の事も

當てにするものか、左様なら、と言つて立あがり沓ぬぎの草履下駄足に引かくるを、あれ  
 吉ちやんそれはお前勘違ひだ、何も私が此處を離れるとてお前を見捨てる事はしない、  
 私はほんとに兄弟とばかり思ふのだもの其様な愛想づかしは酷からう、と後から羽が  
 ひじめに抱き止めて、氣の早い子だねとお京の諭せば、そんならお妾に行くを廢めにしな  
 ざるかと振かへられて、誰れも願ふて行く處では無いけれど、私は何うしても斯うと決  
 心して居るのだからそれは折角だけれど肯れないよと言ふに、吉は涙の眼に見つめて、  
 お京さん後生だから此肩の手を放しておくんない。





# 青空文庫情報

底本：「樋口一葉全集第二巻」新世社

1941（昭和16）年7月18日発行

1942（昭和17）年4月10日再版

底本の親本：「校訂一葉全集」博文館

1897（明治30）年1月9日発行

1897（明治30）年6月再版

初出：「国民之友 二七七号」

1896（明治29）年1月4日

※送りがな、振りがな、漢字の使い方の不統一は、底本通りです。

※誤植を疑った箇所を、「校訂一葉全集」博文館、1897（明治30）年1月9日発行の表記に  
そつて、あらためました。

入力：万波通彦

校正：岡村和彦

2014年11月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# わかれ道

樋口一葉

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>